



特 252  
717

229  
2



始



仰  
再  
庫建

輯二第

アタナシオ會發行

神學博士 稻垣陽一郎著

「主は實に魅へりたまへり」

特252  
717



### 「主は實に甦へりたまへり」

#### 一、キリストの復活の豫備的事實

(一)キリストの死の事實

(二) 十字架の空虚なりしこと

復活の事實

(一) 聖徒パウロの證明

(イ) 其出所

(ロ) 其二要點

(ハ) 近世の異論と辯明

(1) 空墓に言及せずとの説

(2) 幻影なりとの説

(ニ) 以上に対する辯明

(三) 福音書の證明

(イ) 復活の事實

(ロ) 復活後の顯現

(ハ) 復活の記事に關する近世の異論と辯明

(1) 記事の詳細の點に相違ありとの點

(2) 顯現の場所に關する「傳」に相違ありとの點

(3) 顯現の唯弟子らの範圍に限られし點

(4) 弟子らが復活後の主を見ることが困難なりし點

#### 三、復活體

(一)キリストの復活に關する福音書の二様の記述

(イ) 物的記述

(ロ) 靈的記述

(二)キリストの復活體の二様の表現

(イ) 正規的狀態に於ては靈界に於ける表現

(ロ) 物界と關聯しての物的表現は特に採用せられし非正規的の表現

(三) 右兩記事の調和

(四)キリストの復活體に關する近世の異論

「體的」にあらずとして靈的なりとす

(イ) 復活體に關する誤解

(ロ) 復活に關して「靈的」とは無意義ならん

四、近世の排復活諸説と其辨駁

五、概括

(註) 我らの主の復活に關して論ぜんと欲する所詮からず。或は「三日目」の問題、或は復活後の顯現に關する福音書記事の解釋困難とせらる諸問題、或は復活の教義的辯證的の意義等皆然り。されど紙面に限れば他日に譲ることとす。



## アタナシオ會

- 一、公會遺稿の信仰を確守するとともに、近代の智識思潮に應じて之を擁護辯證するを以て目的とす。
- 二、以上の目的を達せんが爲に「信仰再建文庫」を發刊し、又臨時研究会、講演會等を開催す。
- 三、男女を問はず右の目的に共鳴する聖公會員の有志を以て組織す。會員には會員證を交付す。(入會申込は隨時隨意)
- 四、會員は右「文庫」發行毎に實費を以て其頒布を受く。當年四季刊行の豫定。

東京市外池袋一六一二 稻垣方

アタナシオ會

換替東京四六四三五

昨年創立以來、監督初め聖職並に信徒諸氏の聲援を得たるを多幸とす。尙會員數次第に増加して、資金の憂なく、將來此「文庫」を繼續出版し得るに至らんことを望む。

公會の信經にいふ、「主は……十字架に釘りられ、苦難をうけ、葬られ、聖書に合ひて三日目に甦り……たまへり」。然るに世には、主の復活に關して、種々の點に疑念を懷き、若くは曲解せんとするもの尠くはない。さればイースターを迎へんとするに際し、此肝要事項に關し検討せんとするは無益ではないであらう。

### 一、復活の豫備的事實

キリストの復活の豫備的證明として、二個の注意すべきことがある。一はキリストの死の事實、二はキリストの御屍の葬むられし御墓が、イースターの曉に空虚なりしことである。

#### 一、キリストの死の事實

キリストの復活はキリストの死と直接の關係がある。キリストの死は眞實にてあらざりしとせば、其復活はあり得ないからである。故にキリストの復活を論ずる前に、先づキリストの死の事實を知ることは肝要である。之は我らの論野を清掃する爲である。世にはキリストは眞に死せず、唯假死状態にありしが蘇生せしに過ぎずといふものあれば、キリストは眞に死したまひしことを證明せねばならぬからである。之には三四の注意すべきことがある。

(一) 聖徒マタイ並に聖徒マルコとも、キリストは十字架上に大聲を擧げて靈を互したまへりといふ。言換れば死にたまへりとして居る(マタイ二十七ノ五十、マルコ十五ノ三七)。

(二) キリストは十字架に釘けられたまふ前より、身心の疲勞激甚であつた。兵士が槍にて、其脇を突きしとき血と水と其處より流れ出しとあるは、キリストは既に死にてありしことを證するのみならず、其死の直接の原因は心臟破裂にてありしことを證するものなりとせらる。

(三) かりにキリストは死にてあらざりしとするも、兵士が、槍にて脇を突きしことは致命傷にて、充分其死の原因を爲すものなりと見得られる。

(四) 加之、キリストは死せざるを得なかつた。何故となれば、キリストが罪の爲に供へんとしたまひし賠償は當然死を含んで居るからである。

(五) キリストにして若し眞に死にたまはざりしとせば、我らの爲に眞に死に勝ちたまひしとすることはできない。

以上の諸點を綜合するときは、キリストの死の事實には一點の疑を挿み得ない。

(註) 世には一種の論者ありて、十字架の刑は然か速かに人をして死に至らしむるものにあらず、其證據には(一)キリストと偕に十字架に釘けられし強盜は、後に兵士が屍を取拂はんとて來りしとき、尙生きてあ

りしことによりても明なり。(二)加之、ピラトはイエスは既に死にてありしとき、驚きしといふにあらずやといふものがある。されど此種の説の取るに足らざることは、前説の諸證據を参照すればおのづから明白となるであらう。

(註) Bishop Pearson: The Apostles' Creed, pp. 209—217

F. J. Hall: The Passion and Exaltation of Christ, pp. 144—5

## 二、御墓の空虚なりしこと

(一)福音記者の記録。キリストの復活に關する四福音書の記事は、イースターの曉にキリストの御屍を埋りし御墓の空虚にてありしことより始められて居る。之は最古の福音書たるマルコ傳に載せらるるを初めとし、他の福音書も皆之を載す。聖徒ヨハネに至りては、此事實の目撃者として、又記録者として、之を記して居る。マルコの記す所は、聖徒パウロのいふ所、又後の他の福音書のいふ所を肯定するのみならず、其記す所、直截單純にし、目撃者自身の反響を殘せる如く思はる。

四福音書の記事には多少の相違あり、御使は御墓の内にありしか、又外にありしか。一人なりしか二人なりしか。ガリラヤへ往けと命ぜしか、然らざりしか。婦人たちは恐れて何人にも此事を告げざりしか、弟子等に告げしか。御墓を訪ねしは一人の婦人なりしか、數名なりしか、將又一群の婦人なりしか。此等の細目の點は如何にありしにもせよ、肝心の一事は極めて明白である。即ちイースター

(4)

の日に、主の御屍を葬りし御墓は空虚にてありしといふ點に一致して居ることである。此點は四福音書とも共同的に證據を提供するが故に、疑義を挿む餘地はない。

空墓は初代教會より今日に至るまで、「キリストの復活の主要なる保證なりとせられて來た。空墓はど文献的證明に關して、充分檢試を経しものは他にないといふも過言でないであらう」(セルベイン)。福音書を以て全然歴史的に無價値なりとせば、其空墓に關して提供する證據を否定するは論理的なるべけれども、其歴史性——(歴史的に有價値として)——を受認しながら、先入主的に此空墓を否定せんとするは證據を正當に取扱ふなといふことはできない。其爲す所、科學的方法によるといひ得ない

(註) 消極的の批評家すら空墓を認む。「婦人らが折角の目的を達し得ざりしは、畢竟御墓は空虚にてありしに由る」(ホルツマン)

(5)

尙此事に關する福音書の記事に注意すべき數點がある。

(一)ペテロとヨハネは婦人の報告を受けて墓に急ぎ走りしが、ヨハネは中に入りて「之を見て信ず」(ヨハネ廿ノ八)とある。當時尙主の復活を信ぜざりしも、御墓の空虚なりしことを信じた。

(二)祭司長と番兵との問答も亦之を證す(マタイ廿八ノ十一—十五)。番兵は言ひ含められし、宣傳せしが、マタイが其福音書を書く頃(七十年頃)此事ユダヤ人の間にひろまつて居た。若し御墓は空虚

にてあらざりしならんには、此「話」は出て來なかつたであらう。況んや、之を報告せしものは、局外者——朴訥なる兵士なりしに於てをや。

要するに空墓のことは、復活後のキリストの顯現の經驗せらるる前に先づ確認せられた。其順序は左の如くである。(一)先づ御墓の空虚なることが發見せられた。(二)然るに後に復活せる主の顯現の經驗があつた。如何なる批評家も此順序を變更することはできない。即ち復活後の主の顯現を先となし、之を主觀的の幻覺と解し、而て後に空墓は何ら證明なき神學的の推論に過ぎずとすることは許るされなう。

(二)空墓と復活に關する當時の觀念　復活に關する當時の觀念によれば、復活には空墓——屍の葬られし墓の空虚となることは——必須の條件とせられてあつた。墓の空虚ならざる復活とは、當時のユダヤ人には考へられなかつた。(ダニエル十二ノ二)地の下に睡り居る者の中、衆多の者目をさまさん：(詩篇の預言にも空墓のことは記されて居る(詩十六ノ八一—八十一、徒二ノ二七)。従てラザロの甦されしときも、墓より出で來つた(ヨハネ十一ノ四四)。

又我らの主の教説にも「墓に在る者みな神の子の聲をきよて出で來らん」とある。此種の教説は復活は死後身體を一種高等なる存在の状態に適應せしむるであらうとの信仰を抱かしめたであらう。

う。

空墓は又意氣沮喪せる弟子らをして確信を抱かしむる爲に必要であつたであらう。當時の弟子らの心的状態は、主復活せりときよても現に御墓に横はり居りては之を信じ得なかつたに相違ない。故に復活を信する前には、「空墓はガリラヤの弟子らにとりては、必須の假定であつた。」(スバロ—シムプソン)

(註) Salmend : The Christian Doctrine of Immortality, p. 332 參照

(三)聖徒パウロと空墓　然るに聖徒パウロは空墓に言ひ及ぼす所はない。其復活に關する大論章に於ても、何ら空墓に觸るる所はない。かくて批評家の或者は聖徒パウロは空墓を以て(一)辯證的に無價値とせしか、(二)彼は全然之を知らざりしか、(三)將又此種のことには彼の想念外のことにてありしならんと速断せんとする。

されど此種の推論の過れることは左の數點によりても明である。

(イ)コリント前書第十五章に空墓のことに書き及す所なしとて、聖徒パウロは之を知らざりし、或は此事に冷淡なりしと速断し得ない。何故となれば、キリストの復活に關して該章にいふ所は、彼が受けし「傳」の梗概に過ぎずして、彼自身の發明に係るものでないからである。

(ロ)加之、コリント前書第十五章は空墓を前定するが如く見ゆ。聖徒パウロの受けし「傳」によれば「キリストは死に……葬られ……甦り」(三一四節)とある。然るに「死に……葬られ……甦り」とは連次に行はれし身體的經驗を意味す。之は同一のパーソンに生ぜしものにて、死にし者が葬られ、葬られし者が甦つたのである。「葬られ」を「死に」と「甦り」との中間に挿入せしことは、若し葬られし體が甦りしと何ら關係なしとせば、何の必要ありて挿入したるべき。

(註)「イエスの埋葬は其死と復活との間にありしと思はる。此間に密接なる連絡がある。復活とは墓中に横はりし地上の體と何ら關係なかるべき天の體を賦與せらるることなりとするは、不可能である。我らは寧ろ之は墓よりの身體の出で來れるものなりとせねばならぬ。」(シュワルツコフ)。

(8)

(ハ)加之、復活を以て、全然、靈的なりとするは聖徒パウロのコリント前書第十五章に見ゆる「靈の體」の教義と相調和しない。「靈の體」とは、聖徒パウロにありては全然、靈となつたものでない。之は物質が全然、靈の用に供せられし體である。

(ニ)「葬られ」と「甦らせられ」は、ロマ書六章四節に對照せられ、體は此兩種の經驗を爲すことを暗示して居る。

(ホ)「キリストに在る死人……先づ甦り……」(テサロニケ前四ノ十七)は、死よりの體的復活を意味す

ることは明である。

故に聖徒パウロは空墓に言及すことなしとて、直に之を以て、死せる體の甦ることは、彼の神學に適合せずとせしとの證據なりと速断できない。

(註一) (W. J. S. Simpson: Our Lord's Resurrection and Modern Thought, pp. 26—33 参照)

(註二) セルウキン博士は "Essays Catholic and Critical" 中 "The Resurrection" 254 (p. 319)

「復活の全き眞理を諒解せん爲には、三重の證據を必要とすることは、昔の弟子に於けるが如く、今日のわれらにも同様である。(一)復活の主より抽出せる超越的召命の基礎として出現(復活後の)を必要とす。(二)復活と十字架とを一の贖の福音として連絡せしむる繋の爲には、聖書を必要とす。(三)死は實際に征服せられたりとの大保障の爲に空墓を必要とする。」

(9)

(四)空墓を否定する諸説 之には種々ある。皆消極的批評家の唱出せしものである。

(一)兵士らの眠れる間に弟子ら或奸手段を用ひしなりとするもの。空墓の事實と其説明とを區別することは肝要である。聖徒マタイ傳福音書に見ゆるものは、之が説明である。弟子らは奸手段をめぐらせしと對する辯明である。弟子らは御墓は空虚なりと宣言した。ユダヤ人は弟子らは屍を盗み出せしなりと誣言するやう番兵に賄賂した。いづれも御墓の空墓なりしことを認めて居る。



(二)アリマタヤのヨセフが之を運び移せしとするもの。ヨセフは一時、主イエスの屍を其墓に置くやう受合ひしも、永久に不知の人の屍體を其先祖累代の墓所に置くことを好まず、ひそかに他に運び移せしなりとす、之も亦一種の架空説にして、體的復活を排せんが爲に作り出されたるものである。つかりに運び移せしとするも、其運び移せし場所がなければならぬ。又短時日に遠方に移し得しとは思はれない。いづこにもせよ、若しかゝることが行はれしとば、到底人知れずにはあり得ない。然るにかゝることありしとは何處にも記されて居ない。

(三)キリストは十字架上に死せず、假死の状態にて墓に置かれしが、穴中の冷氣に觸れて蘇生せしとするもの。

此説は消極的批評家によりてすら排せられて居る。(註、此ことは後に詳論する所あるべくし)

(四)婦人ら御墓に來りしとき、キリストの屍のおかれありし墓に入らず、過て他の空虚の墓に來り、御墓は空虚なりと思ひ誤りしならんとの説(カーソップレーキ)。勿論かゝる説は取るに足らぬ。ペテロとヨハネ兩人が婦人らの報告に接して、實地検査して、然か認めし事であるからである。

X X X X X

空墓の弟子らに知らるるに至りしは、充分調査せられ、而て後に確認せられし事實にして、復活の

性質よりせる神學上の推論でない。主、甦りたるが故に御墓は空墓にてありしと推論したのではない。

御墓は空虚なりしが故に、主は甦りたまへりと確信するに至つたのである。勿論墓は空虚なりしとは直に其名に葬られありし者の甦りしといふ證據とならぬかも知れぬ。單に空墓のみにては十字架上の死と敗北の如く見えしものを一變して勝利と榮光の幻影を生ぜしめ得ないであらう。されど空墓は事實であつた。事實なりとせば恐らく説明は唯二つあるのみ。(一)之を以て人間の所業とするか、(二)之を以て神の所業とするか。即ち人間の手によりて運び移せしか、將又、大能の御手によりて甦みらせられしかにある。消極的批評は前者を取らんとするも、其推論一も首肯に値するものはない。唯新約聖書のいふ所のみよく此事の真相を解く。「聖き靈によれば、死人の復活によりて、大能をもて神の子と定められたまへり。(ロー11ノ四)

(註) F. B. String: The Miracles in Gospels and Creeds, pp. 12-14

F. J. Hall: The Passion of Christ, p. 178-1, p. 203-

## 二、復活の事實

キリストの復活に關する聖書の證明の主要なるものは二ある。一は聖徒パウロの證明、二は福音書

の證明。

一、聖徒パウロの證明

聖徒パウロの復活に關する證明はキリストの復活に關する最も早きものである。

(一) 其最初の書簡たるテサロニケ前書一章十節に「神の死人のうちより甦らせたまひし御子」とある。之は簡單に過ぐるが如きも、尙復活に言及せし所のものである。

(二) 紀元五十七年、若くは五十八年の頃の記録たるコリント前書第十五章は、復活に關する記事中、最も重きを爲すものである。

わが第一に汝らに傳へしは、我受けし所にして、キリスト聖書に従ひて、我らの罪の爲に死に又葬られ聖書に應じて、三日目に甦り、ケバに現はれ、後、十二弟子に現はれたまひしことなり。次に五百人以上の兄弟に同時に現はれたまへり。その中に既に眠りたる者もあれど、多くは今尙世に在り。次にヤコブに現はれ、次にすべての使徒にあらはれ、最後に月定らぬ者の如き我にも現はれたまへり。

之は復活の事ありてより約二十年頃の記録なるが故に、當時、尙此事、人の記憶に新なりし時の記事である。之によれば、聖徒パウロは既に此事を説教せりとある。これは紀元五十年頃に、コリントを訪問せしことに言及せるものであらう。従て彼は尙此書を認めざりし以前より、キリストの復活に關しては、少くともコリント人に説き居りしことは明白である。

(註) ヘドラム監督はいふ。「此にわれらに提供せられある所のものは、復活の爲にする聖徒パウロの論議のみにあらずして、又聖徒パウロが此事實を承認せし理由をも示さる。而かも又聖徒パウロはかれ自身説教せし所を我らに告ぐと主張するのみならず、之は又教會の教へし所なりと主張するを見る。彼と彼の讀者の意見によれば、此問題に關する彼の教説は、キリスト教會の他の全部によりて懐抱せらるる所のものなりとす」(Bishop Headlam: Jesus Christ in History and Faith. p. 161)

彼のいふ所によれば、復活せる主を見たりといふ五百人以上の兄弟の中、「多くは今尙世に残れり」(六節)とある。従て彼の證明は、主を見しこれらの兄弟の尙生存中に爲されしものなれば、此間にキリストの復活とは、一種の神話なりとか、若くは口碑なりなどの説の生ずべき餘地を存しない。「之は聖徒パウロは現に生存中の人々にして、此事件の直接の證據を提供し得る者の證明に訴へつゝありしことを意味す」(ヘドラム)に「若し五百人が同時に同一の印象を受けたりとせば、之に對する客觀的原因がなければならぬ」

聖徒パウロの證明は、聖徒ルカが、聖徒ペテロのペンテコステの日の説教なりとして記す所のものと符合す(徒二ノ二三—三二)るは注意すべきである。「神は死の苦難を解きて之を甦らせたまへり。彼は死に繋かれ居るべきにあらざればなり」。

(註) ホール博士いふ。「聖徒パウロは血氣旺盛なる青年として教會を迫害せしといふ以上、此種の復活に關

する説教も自然彼の耳に入ったであらう。彼が教會を迫害せしは、復活の事ありてのち、僅かに六年であつたからである(徒七ノ五八八ノ一―三)。イースターの曙に生ぜしことは、直に評判となりしなるべく、又使徒ペテロの説教後には、此事普く當時の社會に知られしに相違なければ、サウロの耳に入りしは、自然「あや」(F. J. Hall: The Passion and Exaltation of Christ, p. 77)

加之、聖徒パウロは自身親しく此事に就て研究し、調査を遂げしに相違ない。彼は此事の證據を調査する必要ありと思ふた。而て其證明を提供して居る。彼の人格と其技能よりして、苟も彼の教へんとする所のことは、充分根據あるものとせんとせしに相違ない。

## 二、聖徒パウロの證明の出所

然らば彼の證明の出所如何。これには注意すべき二のことがある。

(一)彼自身に對する主の顯現である。彼はいふ「母の胎を出でしより我を選び別ち、その恩恵を以て召したまへる者、御子を我内に顯はして、其福音を宣傳へしむるを可しとたまへる時」(ガラテヤ一ノ十六)。「最後には月足らぬ者の如き我にも現はれたまへり」(コリント前十五ノ八)。之は甦りたまへる主の直接に彼に顯はれたまひしを意味す。

(二)彼の受けし所である。彼がコリント前書十五ノ三―八に言ふ所に、主のあらはれたまひしといふ人々のうちに、二人の個人の存することは注意すべきである。「ケバに現はれ」「ヤコブに現はれ」。

復活せる主の此二人に現はれたまひしことは、聖徒パウロの復活觀に重大なる關係があつたに相違ない。

ガラテヤ書一ノ十八によれば、彼は二回エルサレムに上京して居る。「その後、三年を経てケバを尋ねてエルサレムに上り、十五日間彼と偕に留りしが、主の兄弟ヤコブの外、孰れの使徒にも逢はざりき」第一回の上京は回心後、三年目なるが。これには二の注意すべきことがある。(イ)其滞在の二週間に互れること。(ロ)此間にケバとヤコブとに面語せしことである。此ケバとヤコブとは、主が特に個人的に復活後に現はれたまひし人々である。而かも此行特に「ケバを尋ねん」としたりとあれば此面語に於て、彼はケバより、復活に關し、詳しく知らんと欲したであらう。恐らく彼の記せし復活の事實は、これら二人の見證者より得たものであらう。

第二回の上京　ガラテヤ書二ノ九によれば、第一回上京後、十四年後、上京して、彼は再びケバとヤコブとに面語せしのみならず、此度はヨハネにも面語せりとある。「其後十四年を歴て、……復、エルサレムに上れり……」。柱とも思はるゝヤコブ、ケバ、ヨハネは交誼の印として我と……握手せり」。

以上の事實は重要である。何となれば、之は(イ)聖徒パウロの回心後、第一回のエルサレム訪問の

時、即ちキリストの受苦より五年乃至八年後に、聖徒パウロの受くることを得し最も明白なる證據の（文書の形式に於て）ありしこと。（ロ）復活の事後、十年以内にケバとヤコブの信じ居たりしこと、即ち我らの主は死にて、葬られ、三日目に甦りたまひしといふ證據の存すること。（ハ）聖徒パウロを経て、復活に關する元來の見證者たる聖徒ペテロ、聖徒ヤコブ、並に聖徒ヨハネと關聯するに至るからである。

（註一） Bishop Chase : The Gospel in the Light of Criticism. pp. 34—5. 参照）

（註二） ユア監督は聖徒パウロの所謂「受けし所」の「傳」とは、當時既に一定の形を取れるものにて、其中には主キリストの御言の記録も含み居たるならんといふ（何故となれば、「パウロ書翰」に見ゆる倫理的教説は頗るキリストのそれに類似して居るからである）。 Gore : Belief in Christ. p. 89

（註三） ヘドラム監督はいふ「聖徒パウロの信じたるは常にダマスコの途上に於ける彼自身の經驗の故のみならずして、又他の證明の故による」 Bishop Headlam : Jesus Christ in History and Faith, p. 167

### 三、聖徒パウロの證明の二要點

聖徒パウロの證明には、二の要點が含まれて居る。

一は死にて、葬られてのち、キリストは、「三日目に甦りしこと」（之は聖徒パウロの記事中唯一の記事）。二は甦りたまひしキリストは種々の場合に種々の弟子に現はれたまひしこと。或時は五百人以

上のものにも現はれ、其大部分は當時尙存命中なりとす。而て最後に彼自身に現はれたまひとするこゝとである。此事件は三日目の事件として記され、而かも之は唯單に死後の個性の生存を顯現せしといふにあらずして、實に復活とせられて居る。此復活は其前に「葬られ」と記されれば、其葬られたまひし墓よりの復活である。されば復活とは（一）體的の復活にして（二）場所と時間とに關聯せる復活である。

聖徒パウロの記るせる所は復活後のキリストの顯現の全部なりとは思はれない。されどコリント人をして確信せしむるに足る主要のものを擧げたのであらう。從て其顯現は、（一）使徒に現はれたまひしこと、（二）群衆にあらはれたまひしこと、（三）彼自身に現はれたまひし範圍に止めて居る。或は之は顯現を年代的に配列せしならんも、假りに然らずとするも、其證明の効力に影響する所はない。

（註） ヘドラム監督はいふ「我らの所有する最も古き記録の形に存する證明（聖徒パウロの證明）は、次の如き結論を我らに提供す。第一、此信仰は全教會の懷抱せし所のものなること、第二之は周到なる調査によれるもの、第三、出現は現實にしてありしこと。第四、復活は三日目にありしこと——而て之は空墓に關する物語を知れることを意味す」 (Bishop Headlam : Jesus Christ in History and Faith. p. 162)

### 四、聖徒パウロの證明に關する異論

以上は聖徒パウロの証明の要點なるが、世には之に對し二方面より異議を唱ふるものがある。

(一) 聖徒パウロはイースターの空墓空虚となりし御墓に關して、何ら言ひ及す所なきは如何。聖徒パウロがコリント前書第十五章に記す所は、コリント人に既に説教せし所を概括的に述べしものにて、復活に關する詳細なる證據を悉く列舉せんとしたのではないであらう。されど「死にて」、「葬られ」、「甦り」と順次的に言ふ所を見れば、三日目に御墓は空虚なりしことは、其間に黙認せられありと見るべきである。

(註) ヘドラム監督は此種の異議は維持すべからざるものなりとしていふ「予は其意見は到底維持すべからざるものと思惟す。何故となれば、彼はイエスは三日目に死人のうちより甦れりと明白に告げて居る。其日に御墓が空虚にてありたればこそ、弟子らは主の復活の日を定め得たるなれ。三日目のことを記せるは、彼はキリスト教會の此「傳」を承認せしことを示す」(Bishop Headlam: Jesus Christ in History and Faith p. 162)

加之、聖徒パウロは自身にて空墓を見しにあらざる故、復活に關する概略のことを記すに當り、此事は顧みられなかつたのであらう。

(註) ハルナツタは此點に關していふ「此使徒(聖徒パウロ)は空墓に關する音信を知りたりしや。有名な神學者の間には之を疑ふものもあれど、予は有り得べきことなりと思ふ。されは此事に就きて確實に言ふこと能はず。確實なる事は彼及び他の弟子らも、最も肝要なりと考へしことは、發見せしときの墓の

状態にあらざして、キリストの出現であつた。」(Harnack: What is Christianity? 英譯百六十一頁)

(二) 聖徒パウロは彼自身に對するキリストの出現と、他の者に對する出現とを區別せず。然るに彼に對する出現は幻影なりしこと故、これらも皆幻影にして、客觀的の出現にあらざるべしとの説である。

然るに聖徒パウロは、論者のいふが如くに彼に對する復活後の出現は唯、單に幻影に過ぎざりしとして居ない。彼は内的の幻影と、客觀的の出現とを區別して居る。

(イ) コリント後書十二ノ一—四に於て語る所の經驗は幻影である。「この人は十四年前に第三の天にまで取り去られたり。」彼は又トロアスに於て、夜のまほろしを受けしことを記す。「夜、幻影を見たるに……パウロ此幻影を見たれば」(使徒行傳十六ノ九十)。

(ロ) 然るに彼が同心の際の經驗——復活の主の彼に現はれたまひしは、此種の幻影に非ずとして居る。使徒行傳に聖徒ルカの記す所によれば、(九ノ一二—八)「忽ち天より光出で、彼を環り照らしたれば、彼地に倒れたり」とある。之は聖徒パウロ自身、使徒行傳廿二ノ七—十一、二十六ノ二十一—二十五にいふ所に從ひて、ルカの記せしものなれば確實である。

かつ聖徒パウロの用ひし「現はれ」なるギリシヤ語は客觀的表現を記載する爲に用ひらるゝ語であ

る。故に「最後に我に現はれたまへり」とは、同じく客観的の顯現にてありしに相違ない。

加之、コリント前九ノ一には明かに「我は……我らの主イエスを見しにあらず」といふ。若し主が復活後の四十日間にケバに現はれ、ヤコブに現はれ、マグダラのマリアに現はられ、特にシモンには特別の目的にてあらはれ、トマスにも同様のことありしとせば、曾て迫害者なりしも、神が特に異邦人の間に福音を傳ふる器として選ばたまひしものに、特殊の顯現を與へたまふことは合理的のことである。

(註一)ハルナツクはいふ「パウロは其イースターの信仰を」第二のアダムは「天よりなりしとの事と、彼のダマスコへの途上に於ける經驗——神が其御子を尙生きていますとして彼に示したまひし經驗の基礎に置て居る」。

(20)

(註二)劍橋大學の故スキート教授は其「受難後の我らの主の顯現中」にいふ。

「此事の全體に對しては一の説明——唯一の説明がある。之は他ならず。イエス、キリストは現象界の幕の彼方に生きて働きつゝありたまふとのことである。……サウロを絶倒せしめし異象は、全然主觀的のものでなかつた。之は一種抵抗すべからざる勢力が外部より來ありて、彼の精神に作用せし結果であつた。此外來の不可抗的の勢力とは、甦りたまひし主なることを彼は知つた。主が世界より最後の消滅したまふてのち、多年を経て、其最大の敵をして、第二の誕生を爲さしめんとて干涉を行ひたまふたのである。使徒の家族の中「最後に月足らぬ者の如き我にも現はれたまへり」。使徒パウロ自身の意識に

とりては月足らぬ誕生は、主の復活の最高の證據であつた。他の人には空虚となりし御墓、若くは四十日間の出現に比して、此事を確信せしむるには稍薄弱に見えたかも知れない。されど使徒パウロの立證より充分割引してのち、尙此物語には彼自身の言ふ所よりてのみ説明せられ能ふ一の奥義は依然として存するを見る」(H. B. Swete: *Appearances of our Lord After the Passion*—稻垣譯本百二十七—八頁)

## 二、福音書の證明

四福音書はキリストの復活に關し、二重の證明を提供す。(一)復活の事實、(二)復活後の主の顯現である。

右の内、復活の事實——(一)キリストの十字架に釘けられて死にたまひし事、(二)死にて葬られたまひし御墓の「三日目」の朝、空虚なりしこと等に就ては、既に述ぶる所ありたれば、此に反覆せず。

### 一、イースターの朝の事件と其後

イースターの朝の事件に就ては、各福音書の記事は詳細の點に於て、稍異なる所あり、從て正確に事の顛末を決定し難きも、概括すれば、略左の順序なりしと思はる。

(12)

(一)婦人らは香料を携へて、復活の朝、早御墓に赴いた(マタイ廿八ノ一)(香料のことは記さず)、マルコ廿八ノ一四)。(二)これより先き大なる地震ありて、主の御墓の石は轉ばしのけられ、主の使、其上に座し居た。番兵見て恐る。(マタイ廿八ノ一五、マルコ十六ノ五、ルカ廿四ノ一三、空墓のことを附記す)。(三)婦人等は御墓「開かれあり、若者」其處に坐して、キリストは其處に在らず、甦りたり。使徒たちに、主は甦りて、ガリラヤに彼らを見るべしと傳へよと告げられた。(マタイ二十八ノ五七、マルコ十六ノ六、七、ルカ二四ノ五八、マルコ十六ノ十五、マタイ廿八ノ二は「主の使」といひ、ルカ二四ノ四二は「二人の若者」といふ)。(四)婦人たち御墓を去る。主は彼らに遇ひ、「安かれ」といひたまひ、弟子たちに告ぐる音信を托したまふ(マタイ廿八ノ九、十)。彼らゆきて弟子たちに告げたれど、彼らは信ぜなかつた(マタイ廿八ノ八、ルカ二四ノ八一十一)。(五)兵士等は其見し所を祭司長に告げしに、彼らの眠れる間に弟子たち來りて、キリストの屍を盗み去りしなりと傳へよとて、賂をうく(マタイ二十八ノ十一十五)。(六)マグダラのマリヤは御墓の空虚なるを見て、ペテロとヨハネとにゆきて告げた。兩人は御墓に到りしに、御屍はなくして包みし布の残されたるを見た。ヨハネは之を信じた(ヨハネ廿ノ一十)。(七)マグダラのマリヤは御墓に止りしに、二人の御使を見た。次で復活したまへる主を見た。初めは園丁ならんと思ふた。マリヤは往きて、「我は主を見たり」と弟子らに告げた(ヨハネ廿ノ十一十八、マ

ルコ附録十六ノ九十一参照)。(八)甦りたまへるキリストは、其夕、エマオの途をゆく二人の弟子らに現はれ、彼らと語りたまふた。一人はキリストのパンを劈きたまへるを見るまでは、主なりと知らなかつた。兩人は早速エルサレムに引き返し此事を弟子らに告げしに、「主は實に甦りたまへり」と彼らにいふを聞た(ルカ二四ノ十三一三五)。(九)其夜、主はエルサレムに於ける弟子らに現はれ、彼らの前にて食したまふた(ルカ二四ノ三六一四三)。(十)一週間後、十一弟子に現はれ、トマスに傷跡を示し、確信せしめたまふた。トマスは其結果「我が主よ、我が神よ」と叫んだ(ヨハネ廿ノ二六一二九)。(十一)後又ガリラヤ湖畔にて七人の弟子らに現はれ、彼らに語りたまふた。(ヨハネ附録廿ノ一二三)。(十二)ガリラヤにて十一弟子らに現はれたまふた(マタイ廿八ノ十六一十七)。(註)ホール博士は之は一時に五百人に現はれたまひしと相應するものならんといふ(コリント前十五ノ六)。(十三)最後に復活後、四十日目にエルサレム附近にて、使徒たちに現はれ、雲中に昇りたまふた(ルカ二十四ノ五十、五十一、徒一ノ五十一、マルコ附録十六ノ十九参照)。

要するにこれらの記事に注意すべきことは、(一)婦人の經驗に關する四個の記事あること。(二)現在せし婦人の名前の知れ居ること。(三)記事は一貫し居れど、各自獨立なること。

### 一、福音書の證明よりする結論

以上福音書の提供する證明より歸納し得る結論は左の如し。

(一)我らの主イエス、キリストは其死と其葬のありし後、三日目に、何事か生じ、主の御體は墓より出でて、弟子らに現はれたまひしこと。

(二)之によれば、使徒等の採用して宣言せし結論以外の説明は不可能となる。即ち我らの主イエスキリストは、其死後、三日目に甦りたまへりとのことである。

(註) 此點に就て今の牛津の監督ストロング博士はいふ「主の顯現に關しては、此事實際に生ぜしとの證據は頗る強大なる十字架上の磔刑に關する證據にも劣らず強大である。磔刑は一日の中、而かも或時間中に生じたるものも、復活後の出現は幾日にも涉り、又之は種々の觀察家によりて經驗せられた。而かもこれらの顯現の實際に生ぜしことは、初代信徒の確信なりしことは、合理的に疑てない。證據は多くあれど、磔刑の證據の如くに集中的にあり得ない。されど同種類のものである。初代の信徒はキリストの十字架に死にたまひしことを語る如くに、死後のキリストを見、之と語りたりとす。其實際に斷定する所は或人が或事を見しといふにある」

(T. B. Strong : The Miracles in Gospels and Creeds. p. 13)

### 三、福音書の復活に關する記事

四福音は皆復活の記事を載す。

(一)マルコ傳は聖徒ペテロの講述せる所を記載す。マルコは聖徒ペテロの友にして、其母はエルサレムに家を有て居た。マルコは又聖徒パウロが旅行の伴侶でもあつた。従て彼は根據とすべき資料を得るに便宜を有て居る。されど彼の記事は獨立の記録である。而かも之は聖徒パウロのコリント前書の出でてより十年以内に記されたものである。

(二)ルカ傳の記事も獨立的の記事である。記者のルカも聖徒パウロの旅行の伴侶にして、彼の最後のエルサレム上京には同伴した。(紀元五十六年)。彼はヤコブと長老たちとに面語した(徒廿一ノ十八)其キリストの受苦の記事は獨立の出所より得たる詳報によれるものである。恐らくこれは前記エルサレム上京のヤコブと長老たちと面語の際に得たを材料に據れるものであらう。ヤコブは「主を見し」ものである。此點よりせば、復活に關する聖徒ルカの記事は頗る重大なる權威を有す。其主要の點は聖徒パウロ並に聖徒マルコと同様に、御墓の空虚なりしことと、キリストの甦りたまひしことである。(三)マタイ傳の復活に關する記事は、聖徒マルコ傳のそれと符合する所多ければ、ペテロ系統の復活談によれるものであらう。此に見ゆるガリラヤに於ける復活の主の大命令は莊嚴の調を帯びて居る。

(註) マタイは磔刑の記事に於けるが如くに、復活の記事に於ても、超自然的方面を高調する傾向なしとせ



ず。之は記事が移運の際、過大せられし跡を示すものなりとするものもある。

(E. G. Selwyn: The Evidences of the Resurrection in "The New Commentary of the Holy Scripture. 1929 参照)

(四)ヨハネ傳の記事は四福音書中、最も詳密なるものなるが、其復活の記事の資料は他より籍り來れるものと旨定的に決論し難しとせらる。(ヨハネはルカ福音書を知り、又マルコ傳をも知り居たりしならんと察するものである)。ヨハネの記事は受難に於けると同様、復活に關しても、内的に一貫し居る。

第四福音書の記者のゼベダイの子ヨハネたりとの傳承的の立場は、批評家によりて次第に確定せられんとして居る。此ヨハネは復活の主を直接見し見證者の一人にして、其空虚となりし御墓を實檢せし者である。

(註) Bishop Chase: The Gospel in the Light of Historical Criticism, Preface, XXVIII.  
N. P. Williams: The Easter Morning. pp. 45—47 C. Gore: Belief in Christ. pp. 107—111. 参照。

#### 四、福音書の證明に對する異論

復活に關する福音書の證明に關し、異議を唱ふるものは、略左の諸點を指摘す。  
復活に關する詳細の點に相違は證明の價値を減ずとす。

(一)詳細の點に相違ありといふは、主としてイースターの拂曉に於ける事件である。之は極めて自然なりとせねばならぬ。何故とならば、(イ)其復活に關する報道の本源は婦人である。(ロ)而かもこれらの婦人らは絶大なる事變に遭逢して心亂れ興奮の状態に於て告げてからである。(ハ)婦人らは其見し所を各自思ひ／＼に傳へたであらう。かくて福音記者は之を記録せんとするに當り、此「傳」を材料せるとき詳細の點に於て相違の生ぜしは自然である。此種のこととは世上の經驗に常に見る所にして、同一事件を報道せんとするに當り、各見る所、受くる所の印象は同じからざるが故に、詳細の點に於て其報道に相違生ず。況んや、これらの婦人らは訓練せられたる「リーポーター」にあらざるに於てをや。況んや其報道せし事件は全然思もよらざる超自然的の事件なるに於てをや。

(註) Bishop Headlam: Jesus Christ in Faith and History. p. 194 参照)

されどこれらの記事は主要の點に於て一致することは注意すべきである。(イ)御墓の空虚なりしこと。(ロ)キリストの甦りたまへりと御使の告。(ハ)甦りたまひしキリストの活在了たまふことの人々に見られしこと等である。これだけにも充分である。これ以上要求せんとするは恐らく好奇的なりとの譏を免がないであらう。

(註) ホール博士いふ「近來の消極的批評家は此事に關して、他の事に於けると同様に、精細なる歴史的な

献を要求するも、それは無理なる注文である。加之、福音書は歴史の教科書として記るされたのでない。唯、信徒の建徳の爲に記念として記されしに過ぎない。未信徒の爲に記されしものならんには、其書き方もおのづから異つたであらう。されどそれにしても、近世の消極的批評家が要求するが如きものは得られなかつたであらう。」(F. J. Hall: *The Passion and Exaltation of Christ*, p. 197)

(二) 甦りたまひし主の弟子に對する顯現の場所に關する「傳」に矛盾ありとするもの。

最古のマルコ傳には(マタイ傳にも)イースターの朝、婦人らへの顯現ののち、エルサレムに於ける弟子への顯現を記さるのみならず、却てガリラヤに於て甦りたまひし主を見しものゝ如くす。然るにルカ傳とヨハネ傳とは、エルサレムと其附近に於ける數回の顯現を記すは如何に。殊にルカ傳の記事はガリラヤに於ける出現に言ひ及す所はないといふ。

キリストの復活後の顯現の「傳」には(一)ガリラヤ顯現と、(二)エルサレム顯現の二種あることを認めねばならぬ。此兩傳説の起源は恐らく左の如くであらう。

使徒團以外のガリラヤの信徒らは一時、エルサレムに於ける主の顯現を全然聞知しなかつたであらう。かくて此兩傳説は、其場所に固定し、記載せられてのち、相互に融合する餘地がなかつたであらう。福音記者はこれらの固定せる傳説のいづれか一方を採用したのであらう。故に兩傳説とも——兩記事とも眞實であらう。

問題は弟子らは、ガリラヤに於て初めて甦りたまへる主を見るべしと告げられたるに、何故に弟子らは、エルサレムに於て主を見しやといふことである。此點に關してホール博士はいふ。

「説明は容易である。弟子らは復活の喜の音づれに信を措かざりしとある(ルカ二四ノ十一)。從てキリストの告は正眞のものと納得できなかつたのであらう。彼らの主はガリラヤにて彼らに見えたまふとは、先づ彼らの眼にて主を見たてまつるまでは、到底信じ得られなかつたであらう。故に主は其御言にも拘らず、彼らに免じて、數回の顯現を與へたまふたのであらう。」

以上の説明は實際的にして、ユダヤに於ける顯現を説明するとともに、ガリラヤに於ける顯現までに相當の時間を餘すこととなる。(F. J. Hall: *The Passion and Exaltation of Christ*, pp. 93—4)

(三) 甦りたまひし主の顯現の唯弟子らの範圍に止りしは如何。

若しキリストにして眞の其復活の事實を確かに知らんとすることが目的なりしとせば、世界一般の人々、並にユダヤの官憲等に知らすべきあらざるが。然るに福音書によれば、キリストは群集を避けたまひしもの如くである。從て復活に關する證明にして、無私公平なる局外者の證明を缺くは如何。

(イ)當時の形勢よりせば、キリストを信せるものは少數にして、敵せものは多數であつた。從てキリストを十字架に釘けしほどのものに現はれたまふとも、之を信せざるのみか、却て嘲弄したであら

う。(ルカ十六ノ三十一参照)。

(註) 富める人とラザロの譬に於て、キリストは、アブラハムの口によりて、「若しモーセと預言者に聽かずば、死人のうちより甦るものありともきかざるべし」と仰せたまひしは、其敵に復活後の自身を示したまふことの必要なるを暗示す。

(ロ)復活の如き事實は、既に靈的に相當の教養を受けたるものにあらずば、其性質、其意義等到底正當に解釋し得らるべきでない。之は今日にても消極的の見解を取るものは、此種の事實を受認すること難き所以である。従て此點よりせば、局外者に對し、復活後の主の顯現のなかりしとて怪むに足らぬ。

(ハ)神の啓示には一種の節約がある。控目がある。「豕に眞珠を投げ與ふな」の原則は守らる。靈的奥妙の眞理は、肉の心を抱ける「豕」に投げ與へらるることはない。

(ニ)かりにキリストの敵らは、エルサレムの樓房にて、弟子らと僧に在りたりとて、彼らは果て復活の主を見得しかは疑問である。唯、地的の眼にては、復活の主を見たてまつることはできなかつた。

要するに、復活後の主の顯現は、其事件の性質上靈的に啓明せられしものにあらずば、經驗し得ざるものであつた。故に弟子らの外のものへは顯現はなかつた。今日にても非靈的の心狀のものはキリストは死より甦りたまへりと信じ得ない。さればとて、之が爲に主は死より甦りたまへりとの證據を

疑ふ必要はない。

(註) Bishop Westcott: The Revelation of the Risen Lord, pp. 10—12

W. Miligan: The Assention, pp. 32—38

W. J. S. Simpson: The Resurrection of Our Lord, pp. 144

" " The Resurrection and Modern Thought, pp. 41—92

F. J. Hall: The Parison and Exaltation of Christ, pp. 196

(四)弟子らは復活後の主を見ることの困難なりしは如何。

マグダラのマリヤは以前に主を知り居りしにも拘らず、甦りたまひし主を見違へしにあらずや。故に弟子らの見證も充分に信を措くに足らず。従て後にキリストを見しといふも、恐らく此種の幻覺の所産にあらざるべきか。

エマオの途上の二人の弟子らも甦りたまひし主と長き時間ともに歩みながらも、主と知らず、其消失に際して、初めて氣附きしといふは如何にも愚の骨頂ならずやといふものがある。

(イ)されど復活後のキリストは絶大なる變化を経たまひたれば、普通の物理的法則にて其運動を説明し得なかつた。従て一目認識し難つたに相違ない。

(ロ)されど復活後の主は曾て此世に在せしときの主と、其パーソンに於ては同一の主にて在りました

ればこそ、弟子らの間に認められ得たのである。懐疑的のトマスすら其傷跡を示されて認め得た。

(註) 復活後の主は肉眼にて認識すること困難なりしことに就ては

W. J. S. Simpson : The Resurrection and Modern Thought. pp. 85—88 参照

X X X X X

復活の事實に關して福音書の提供する證明は略以上の如し、之を聖徒パウロの證明と相綜合するときは、信經に發表するが如く、我らの主は死にて葬られ、三日目に甦りたまひしことを確知する。

(註)「復活を純然たる主觀的、心理學、若くは病理學の立場より説明せんとするは、無益の勞である。唯此事は眞實客觀的、超自然的の事實としてのみ當時の歴史的並びに心理的の事情に適合とすといふべきである。」(マイシユラーグ)

#### 四、キリストの復活體

##### 一、キリストの復活に關する福音書の二種の記述

近世批評は、キリストの復活に關する福音書の記事に、二種の性質を見るとす。一は物的記述にして他は靈的記述である。

(一)物的記述 之はキリストの地上にて有ちたまひし身體の復活せしなりとするものにして、左の諸點によりて示さる。

(二)此復活せるキリストの此體は、十字架に釘けられし體と同一なりしこと。(三)傷跡の尙認識せられしこと。(四)復活せる主は地上に堅く立ちたまひしこと。(五)幽影の如くにあらず、人間の形體の如く確固なりしこと。(六)最も物的の方法によりて「我を撫て、見よ」と仰せたまひ、「靈には肉と骨となし、我にはあり、汝らの見る如し」と仰せたまひしこと。(七)復活後、屢弟子たちに現はれたまひし主は、遂に四十日の後には、弟子たちを伴ひて、エルサレムを過ぎ、オリブ山に到りたまひしこと。

以てこは皆物的記述にして、如何様に解釋せらるるにもせよ、物的分子の存するを認めねばならぬ。

(二)靈的記述 然るに他方に於ては、全然之と異なる記述が、キリストの復活體に關して用ひられて居る。

(一)復活せる主はもはや以前の如く、弟子らと共に住みたまはず、何人も知り得ず、何人も知り得ざる世界に存在したまひしこと。(二)弟子たちは何處に主を發見すべきかを知らなかつた。(三)弟子たちは主は果て何時まで此状態に止りたまふかを知らず、又地上に於ける時の如くに引止めまつること

も不可能であつた。(四)其來り、其去りたまふことは全然思ひ掛けなかつた。其出現も、其消失も、神祕不思議であつた。(五)出現に當りては主の外貌は時として大に變化せるものゝ如く見えた。親しく主を知りし者にすら、之を認め得ざるほどであつた。(六)主はもはや常人の如くで在さなかつた。慨していへば、以前に自然に見えしことは、今は奇跡的に、以前に奇跡的に見えしものは、今は自然的であつた。

かくて批評家の或者は、右兩種の記述に矛盾あるものの如くにいふ。果て然るや。以下此點に就て考察を試みんとす。

## 二、キリストの復活體の二様の表現

體とは何乎。之は人格性の表現—自己發表の機關である。有名なるモーバレー博士はいふ「人體は必須である。之は地上に於ては、靈的人格性の唯一の方便にして、又條件である。勿論人體は靈を表現すること頗る薄弱であるかも知れない。……されど體以外に、靈的生命の方便はない」と。實際人間の體は此世に於ては、人間の靈の用具にして、又其表現である。勿論、環境如何によりて表現の方法に相違があるであらう。此世に於ける物的環境には、之に適應する人間の通常の體がある。靈界の靈的環境には、之に適應すべき靈の體があるであらう。聖徒パウロの所謂「血氣の體」は物界に適す

る表現にして、「靈の體」は靈界に適する表現である。(コリント前十五章)。ヘブル書の記者は、「我らは無數の證人に圍まる」といふ。我らは氣附かざれど、我らの周圍には、別種の人格表現の機關を有するも、物界に適應せざるが故に、我らは其存在には、氣附かざる多くの人格があるかも知れない。以上の點よりせば、キリストの復活體は二様に見得らる。(一)靈界に於ける表現と、(二)物界に於ける表現と。

(一)キリストの復活體は正規的狀態に於ける固有の性質よりせば、靈界に於ける表現である。

之は聖徒パウロがコリント前書第十五章にいふが如き「靈の體」である。「靈の體」とは、靈界の環境に適應せる體である。之は靈の最上の表現である。モーバレー博士の所謂「靈の理想的完全の表示」である。

聖徒パウロの謂ふ所によれば、未來の靈界に於ける存在は、體を有たざる靈のみの存在でない。却て靈は最も完全に其存在に適應せる表現機關たる體——一種の體を與へられたる存在である。勿論此事に就ては、聖書の示す所以外に、我らは何ら知る所はない。「靈の體」は其存在に於ては、非物的、其現在は非感觸的にして、手にて觸れ得ず、物的機關若くは器具にて辨知し得るが如きものにてはあり得ない。かくの如きは實にキリストの復活體の自然の狀態——正規的の狀態であつた。

福音書の示す所のキリストの復活體の靈的記述は、正さに此方面に於ける記載である。即ち(一)此世を離れて存在し、(二)此世と直接交渉なく、(三)其所在を確知し得ず、(四)物的障礙物の爲に其作動を妨害せらるることなく、(五)其運動は評釋し難い。これは畢竟此世の生活には堅固なる血肉は肝要なれども堅固なる血肉は靈界の存在には、却て障害となるからであらう。

(二)物界に於ける表現は主が復活後に自己表現の爲に特に採用したまひし表現である。

之は復活せる主と、物界と關聯せる方面にして、前者の正規的狀態なるに反し、非正規的狀態である。福音書によれば、キリストの復活體は實際人に見られ、又實際、人に接觸せられたりとある又實際然りしに相違ない。されどこれはキリストの復活體の正規的狀態にあらざることを忘れてはならぬ。即ち之れらは特殊の目的の爲に採用したまひし特殊の表現であつた。若し復活せる主の御姿が見られ、其御聲が聽かれ、其御體の一部に觸れ得たりとせば、之は特殊の立證の爲に、又は特殊の教訓の爲に、特に、然らせられしものである。これらの目的の爲に、復活したまへる主が、(一時我らの物的組織の範圍内に其靈的存在を持ち來したまひしに外ならない。

されど若し一旦無形の神がインカーネートしたまひし事に想ひ到るとき、此事は怪むに足らない。無形の神が有形の人性をとりて自己を啓示したまひしが如く、活したまひてのち、靈界の存在に入れ

るキリストが、一時其靈的存在を物界に持ち來したまひしに過ぎない。靈性の外部的表現には、必ず或種の物的仲介物を必要とするからである。又これ以外に靈的存在が自己を物界に表現する方法はないからである。

復活後、キリストは靈界の存在に入りたまひしも、此世に残したまひし信仰不確固なる弟子らをして、其活在を確信せしむる必要があつた。復活と空墓と其後の出現等、皆之が爲であつた。

### 三、キリストの復活體に關する福音書の二様の記事の調和

キリストの復活體に關する二様の記事を見るときは、以上二種の狀態に心を留むることは肝要である。

かくすることによりて、一見矛盾するが如き記事の調和を見得る。即ち復活後の出現の目撃せられしこと、其復活體に觸れ得たりしこと等は、主が皆一時特に採用したまひし狀態にして、物界に居住する者の爲に、特に物的條件を採用したまひしに過ぎない。

要するに福音書記者は歴史的方面より、キリストの復活を記し、聖徒パウロは復活體の性質を抽象的に教示したのである。兩者の間に何ら論理的矛盾はない。一は特殊の目的と必要上、採用せられし復活體の狀態、他は其正規的の狀態のみ。

キリストの復活體は本來全然靈的のものなることを信ずればとて、其靈體が或特殊の場合に物的條件の下に表現せしことを否定せねばならぬ理由はない。復活せるキリストは、正規的には人間の感覺と無關係の状態に存在したふた。されば時としては、辯證上、教訓上、人間の感覺關係を臨時に採用したまひしのみ。

#### 四、キリストの復活體に關する近世の異論

キリストの復活體の性質と特質は略上述の如くである。然るに近世キリストの復活を以て「體的」にあらすして、靈的なりと説き棄てんと試むるものがある。之には指摘すべき二三の點がある。

(一)先づ復活體に關する誤解がある。「復活」(Resurrection)は、「蘇生」(Resuscitation)を意味明しない。さりとて「死人の中より甦り」とは、地上にて有ちたまひし其儘の血肉——有限の物的身體が死後に再現せしことをも意味しない。地上に有ちたまひし體は、絶大なる變化を経て靈化せられてあつたことは監督ウエスコットのいふ如くである。

「絶大なる變化は主に生じた。主は同じ主にて在ましたれど、尙異つて居ました。主は唯自己を啓示したまふと思召されし者にのみ啓示したまふた。主は我らの現在の法則に従ひたまひしも、尙これらの法則に制せられたまふことはなかつた。これら一見矛盾せるが如きことは、「復活の道德的目的よりして免かるべからざることであつた。キリストは弟子らに二の大なる教訓を與へんとしたまふた。(一)主は人體を墓より甦らせ

まひしこと、(二)主は之を榮光化グロリアライズしたまひしことである。これらの眞理を諒解せしむるに當り、時としては著しく靈的に、又時としては著しく物的なる顯現によりて(兩者とも現實なれど)しまふの外に、他に方法ありしとは思はれない。……一旦十字架に釘けられし「體」を再び採りたまひしことは、他の方法によりて容易く得られざる概念を常人に與へた。主は其弟子らをして感覺によりて認識せしめんが爲に、わざ／＼採りたまひし特殊の外的形様は、必ずしも主が纏ひたまひし衣よりも、一層多く榮光化せる主のパーソンに關係あるものにあらざること、一考せば、自から明である。

(Bishop Westcott: The Gospel of Resurrection p. 106. Note)

(二)論者は「靈的」復活といふも復活に關しては、「靈的」とは恐らく無意義なることを免がれないであらう。

純然たる靈はキリストの仰せたまひし如く、「肉と骨となし」。從て見るに能はず、言ふに能はず、觸るゝこともできない。故に復活が全然「靈的」ならんには、弟子らは復活後のキリストを客觀的に(福音書の記す如く)見ることは、不可能にてありしに相違ない。

然るに復活せる主は一度ならず、二度ならず、幾度も現はれ、又一個人にのみならず、或は數人に或は團體に現はれ、又一箇所のみならず、數箇所數箇所に顯はれたまひしとせば、其復活體は決して純然たる靈的のものにてありしとなし得ない。或種の「體」——人の目に見え、人の手に觸れ得るものを有ちたま

ひしに相違ない。此點に關してゴア監督はいふ。

「甦れるキリストの體は靈的にありしといふは、畢竟これ以前よりも遙かに少く物質的なりしといふが故にあらざして、却て甦れる此「體」にありては、物質は物的生活の要求にもはや服従することなく、全然かつ最終的に靈に服従せし爲であつた。物質はもはや主を制限することなく、或は妨害することなく、靈的目的の純眞透徹せる機具となつた。

主の顯現は特殊の目的の爲、特殊の形態の下に、特殊の人物への（たとへば主が本人の信仰を燃えしめんことをしたまひし人々の如き）顯現であつた」(Bishop Gore: *The Body of Christ*, p. 139)  
又最近の「聖書新註釋」中にいふ「主は物體が全然靈の目的の統制の下にありし存在の高等なる様式に於て活在了たまふた」(Gore: *A New Commentary* (1929) P. 238)

勿論、之は御墓に葬られしときのものに比すれば、絶大なる變化を経て居る。されど一種の體たる點に於ては異なることはない。靈は或種の機具なくしては、自己を表現し得ない。「靈的實在は體的のもの以外、何らの通路も、表現も、方様をも有たない」(R. C. Moberly: *Ministerial Priesthood*, p. 40)

(註) サー、オリバ、ロッヂチすらいふ「現在我々が宇宙を理解する爲には、物質的用具は必須である。……純然たる靈的のものは、活動的であるかも知れない。其活動は推量し、推論し、信じ得られるかも知れない。されど其存在の認識せらるべき唯一の證據は、物質を通じての其活動の表現のみ」

(Sir Oliver Lodge: *Man and the Universe*, p. 277)

「若し物質の新環境と新使用とに對する自然的可能性は、物質に關する我らの智識と想像とを凌駕

する」とせば、復活せる主の新環境に對し、物質の新使用ありしことは考へ得べきことである。

(F. J. Hall: *Eschatology*, p. 171 參照)

(註) 「體」と「靈」との關係並に、我らの靈が未來に於ける榮光化せらるるときの體の價值等に關しては

F. J. Hall: *The Passion and Exaltation of Christ*, pp. 227—235

R. C. Moberly: *Ministerial Priesthood*, pp. 39—40 等參照。

(三)加之、最近科學の傾向は、物質の竟極性を電氣的現象——電子に歸せんとして居る。若し此事にして確定せられんか、榮光を受けし復活體は、物質性を帯び得ずとの説は、維持を得られざるに至るであらう。

(註1) F. J. Hall: *Christianity and Modernism*, p. 173 參照

(註2) ゴア監督は其最近の「聖書新註釋」にいふ「われらの主の復活の事實は、こと物質の運命に關し、之は遂に絶對的に靈の機具となり、もはや其自由なる活動を何ら妨ぐることなきを暗示す。此事は明かに今日のわれらの經驗外のことなれど、「物質」に關する 近世の解剖は、之を以て不可能なり、荒唐無稽なりとするを許さない。……キリストは常に陰府よりのみならず、墓より甦りたまふた(コリント前十五ノ四、使十三ノ三四—三七)。地につける血肉の自然體は、「靈的」、「天的」、「榮光を帯びたる」體と變じた。而かもよく其自同性を保存した。……」(Bishop Gore: *A New Commentary*, (1929) pp. 313—314, "On the Implication of the Resurrection")



## 五、近世の排復活諸説

キリストの復活に關し新約聖書の證明する處、又公會の信じかつ教ふる所、畧以上の如くである。元來、キリストの復活に關しては、結局唯二の説明あるのみ。(一)之を以て神の行爲となすか、(二)或は之を人間的に——自然的に説明するかにある。前者は基督教的説明にして、後者は非基督教的の説明である。従て若し前者を取らずとせば、唯後者の説明の外、此事件の解釋の道はない。世に此種の解釋を取るものに數種ある。

(一)假死説——蘇生説　之はキリストの死の現實性を否定せんとするものにして、パウラスは其他主理論者によりて採用せられ、ハックスレーも之を唱へしことあるも、今日にては誰も顧るものはない。此説によれば、キリストは眞實に十字架に死したるにあらずして、唯氣絶せる状態にてありしが十字架より卸され、墓中に葬らるるに當りて、其處の冷氣に觸れ、又其體に塗布せられし香料の刺激によりて、蘇生せしに過ぎずとす。従て磔刑はキリストの死の正規的原因にあらざりしとす。又磔刑に處せられて、既に死せりと考へられしものにして、蘇生せし例もなしとせずとす。又磔刑之が辯明を爲すに當り、第一に注意すべきは、キリストの死の現實性である。即ちキリストは眞に

十字架上に死にたまひしことである。之は(既に述ぶる所ありしが如く)警衛の任に當りし局外者たる兵士の認め居る所にして、槍にて其脇を突きしことは致命傷であつた。脇より血と水の流れ出でしは、其死因の心臟破裂にてありしことを示すとせられる。若し然りとせば、キリストの速かに死せしことも怪むに足らぬ。前宵より食物を攝取せざりしのみならず、身心ともに疲勞を極めし後であつたらである。(二)加之、人間の罪の贖の爲に死することは、キリストの本來の意志であつた。さればの與へたまひし杯を飲み干してのちは通常臨終に當りて屢見る生きんとする意志の努力は全然キリストに缺けて居た。(三)假りにキリストは十字架の上に死にたまはざりしとするも、磔刑前に受けし身體的並に精神的苦と又其十字架上の傷を思ふとき墓中の冷氣と香料の刺激とによりて蘇生し、墓門に置かれし重き石を轉ばして逃げ去り得るほどの元氣を恢復せりとは思はれない。(四)此説にては、キリストが墓を出で、後の事件と顯現とを説明し得ない。かつ若し十字架上の死は假死なりしとせば眞に又死する時が來なければならぬ。然るに此種のことば記されて居ない。却てキリストの衣は墓中に發見せられ、主の體は其中より抜け出でしが如くであつた。此事はヨハネが現に見證せる處であつた(ヨハネ廿ノ六―八)。長時間の苦と重傷とが原因となりて一旦假死状態に入り、漸く其状態より蘇生せしものが、自身にて其身に纏ひし布を取り去り、裸體にて諸所を漂浪せしとは思はれない。況ん

や、エマオ途上の長矩離の歩行を爲せしといふに於てをや。又同じタ、エルサレムにて弟子らに現はれしといふに於てをや。かつ主を見しものは、其風貌と舉動とに一種超自然的のものあり、決て假死状態より蘇生せしといふが如き幽靈的の陰鬱たる風を帯びざりしが如く見ゆ。(五)尙弟子らは後にキリストの昇天を目撃せしといふ。然るに此説によれば、昇天の事實は説明し得ない。若し此説の如くキリストの復活とは單に假死よりの蘇生なりとせば、キリストの復活後の顯現の終結は昇天にあらずして自然の死にてあらねばならぬからである。或は弟子らの面前にて死ぬるか、然らずば他の所にて死なねばならぬ。(六)又此説によれば、弟子らの信仰上の變化を説明し得ない。

若し此説に取る所ありとせば、弟子らがキリストの生きて在すことを客觀的に認めしといふ點にある。而かも其妄誕無稽の點は、假死状態より蘇生せし青ざめし重傷者が、如何にして失望落膽の極にありし弟子らをして、天下を相手として、身命を賭してキリストの復活を説くに至らしめしやと言ふ點にある。

要するに此説は福音書の記事は全然虚偽にして、其根本的細目の點に於て信するに足らずとする者の外、受認し得ない。

二、盜失説 之は敵の手によりてか、又は味方によりてか、キリストの墓中の御體は、御墓より他

に盜み運ばれ、御墓は空虚となりし爲、キリストは復活せりと誤認せしなりとの説である。若し敵の手によれりとせば、ピラトか若くは集議所の人々の手によりてなるべく、若し又味方のものゝ所業なりとせば、アリアマヤのヨセフか、其園丁か、若くはマグダラのマリヤの手によりて爲されしものならんとす。

(一)第一福音書によれば、墓邊警衛の任に當りし兵士らは、ユダヤの祭司長並に長老らの求によりて、彼らの眠れる間に弟子ら之を運び去りしと宣傳せしとある。然るに兵士らは之を移し去りしとは思はれない。何故となれば、彼らは現に墓の空虚なるに驚きて、之を上長に報告せしとあるからである。(二)さればとて敵意あるユダヤ人らが之を爲せしとは思はれない。若し然りとせば、彼らは使徒らのキリストの復活に關する説教を聞きしとき、其説の虚妄なる證據として、キリストの屍を提示すべき筈であるからである。(C. R. Robinson: Studies in the Resurrection of Christ. pp. 67-71 參照)

(三)弟子らが之を爲したりとも思はれない。若し然りとせば、弟子らは天下に虚偽の宣傳を爲せしことなるからである。弟子らは虚偽の上に自家の献身奉仕の生涯を築くほどの没義漢でない。又基督教の勝利は虚偽に基くとは思はれない。(四)マグダラのマリヤが之を移去せしとも思はれない。何故となれば、彼には然かする何らの動機をも發見し得ないからである。(W. J. Simpson: The Resurrection

of Our Lord. pp. 41—42) リマタヤのヨセフの場合も亦同様である。(五)此説はかりに御墓の空虚なりしことを説明し得るとするも、復活後のキリストの出現は説明し得ない。(六)従て此説は復活後の出現の最後のものたる昇天をも説明し得ない。

三、幻影説 此説はキリストの復活を以て單に心理的の現象に過ぎずとして説き棄てんとするものである。復活後のキリストの顯現とは弟子らの興奮せる心理に行はれし自家産出の幻影にして何ら客觀的の事實にあらずとす。之は曩にストラウス並にルナン等獨佛の消極的批評家の取れる説なりしが英國にては故ラシユダル博士も之に類する説をとらんとした。ミユミールデルの「大英百科全書」中の「復活」は此見地よりせるものである。

此説によれば、聖徒パウロは昇天前の主の顯現と、ダマスコ途上に於ける主の顯現とを區別して居ない。而かも後者は幻象なりし故前者も然らんといふのである(既述參照)。又弟子らは舊約預言の影響を受けて、メシヤは死後、復活すべしとの主の預言をあまりに心に思詰め居たれば「彼は復活せねばならぬ」、「彼は生き残て居る」、「我らは彼を見た」とするに至つた。即ち智的結論より歴史的事實に一足飛びを爲したのであると。

(一)聖徒パウロのダマスコ途上の經驗に就ては、既に論ずる所あつた。彼は幻象と、回心の際の經

験とを明に區別して居る。況んや、此際、主の顯現の結果、彼は一時盲目となりしとは、主の榮光を實際に見し結果なりとせば諒解し得らるべきも、之を以て單に主觀的の幻影なりとしては諒解せられない。(二)弟子らは舊約預言の研究の結果、復活を期待するに至れりとは思はれない。却て現に復活の事實に直面して、初めて舊約の預言の意義を解するに至つた。弟子らにはキリスト復活の預想はなかつた。預想のなき所、幻影——幻覺を感ずることはあり得ない。(三)之は婦人らが御屍保存の爲に香料を御墓に持ち來りし單純なる事實によりても證明せらる。直ぐ復活すべかりし屍體に態々香料を塗布することありとは思はれない。(四)弟子らは婦人らの主を見たりとの報告を受けても尙信ぜざりしとある。トマスの如きは同僚よりの證言ありても頑として信じなかつた。況んや、弟子らは皆素朴にして、ローマンチックなる思想を懐き得る人物、幻覺を見得るが如き性格の人物なりしとは思はれざるに於てをや。(五)又十字架の悲劇が弟子らの精神に及せし影響は到底復活の事を期待し得るが如き心的状態に弟子らを置かなかつた。キリストの死に關する預言は彼らのメシヤ觀と調和しなかつた。従て十字架の結果として彼らは甚しく意志消沈した。従て復活の幻覺などは思ひも寄らぬことであつた。(六)又同一種類の幻影を弟子ら各自が經驗せりとは思はれない。況んや、「五百人の兄弟」が一時に、一所に同一の幻覺を經驗するなどのこともあり得ない。(七)加之、幻覺は復活の主に接せし使徒た

ちの示せしが如き道徳的驚異を説明し得ない。極端なる消極的批評家の一人すらいふ、「失望より希望と喜悅とに變ずるには相當の時間を必要とする。之は四十八時間内外に成らんとは心理學的不可能事である。最初の使徒らが十字架のことありて三日目にキリストに關する幻覺を見ることは到底不可能であつた。イエスは三日目に死人のうちより甦れりとの傳説は、唯其日に生ぜし顯現に基きて生じたものである」と。

(註)

監督フィスクもいふ「人は使徒らの變化せる如くに詐妄や、錯覺や、感情的熱心や、又婦女的ヒステリイによりて變化するものでない。幽霊や幻影は群衆によりて、一度に見らるるものでない。偉大なる制度は夢を材料として築き上げらるるものでない。薄弱なる人間は、其薄弱なる状態より強くせられし事實を説明する充分なる原因なくして、官能を恐れず、死に直面し、數千人をして彼らの信仰に回心せしめ、彼ら自身の一生を一變し、世界を革命化するが如きことはできる筈はない。」(Bishop Fisk: The Modern Attitude towards Miracles, in "The American Church Monthly" 11/1923.)

(48)

(八)尙他にキリストの復活は幻影として説明し得ざるものがある。福音書の記事によれば、復活せる主は、弟子にとりて接觸可能であつた。マグダラのマリヤ、婦人たち、復活の夜の十一弟子、一週間後のトマス等の弟子らとの會話もあつた。キリストを見しものは、「我を撫でよ見よ」(ルカ二九ノ二四)。主の語りたまふを聽た。弟子らと食事をも共にしたまふた。又クレオバと其伴侶のものとともに食を

爲したまふた。

而かも復活後の顯現は四十日間に互つて居る。心的昂奮の状態は四十日間の長時日に互りて繼續することは不可能である。顯現は又多様多種であつた。幻象は通常一人が、一所に、一時に見る所のものである。加之、死人の幻影は本人の復活を證するものでない。キリスト變貌の際、モーセとエリヤと現はれた。弟子らは之を以て、モーセとエリヤとの復活なりとなさなかつた。

(九)更に福音書の記事に注意すべきは、復活のことは弟子らの豫想外のことなりしが故に、彼らをして正常なる態度を以て、之を信するに至らしむる爲に豫備的事件とも稱すべきものありしことである。即ち御使の出現、婦人らの墓の経験、エマオ途上の事件等である。弟子らは單に理論より復活を結論することはなかつた。

(十)尙福音書の記事によれば、復活は弟子らにとりて(一)思も寄らざりしこと、(二)獨創的なりしこと(先例もなく、想像もつかざることなりしこと)(三)其個性的なりしことは、いづれも此事實の現實性の印象を生ぜしむ。

(49)

以上の理由によりて、唯、心理的に復活の事實を説き棄てんとすることは到底不可能事である。(ストラウスすら自づから之を放棄するに至つた)。(W. J. S. Simpson: Our Lord's Resurrection. pp. 6-19)

(註) 幻影説の一種に客觀的幻影説と稱するものもある。

之はカイクムによりて唱出せられし説にして、復活の幻影は弟子らの自家の所産に非ずして、主は今尙靈界に活したまふことを弟子らに確信せしむる爲に、榮光を受けたまひしキリストより直接送られし幻影なりとす。復活後の顯現は神のなしたまへる勝利の音信にてありとし、「天よりの靈信なり」と稱した。若し此説に取るべき所ありとせば、主の顯現の客觀性を認むる點にある。此説は使徒らの復活に關する信仰を主觀的に説き棄てんとする一切の説を排す。

(一) 然るに此説にては空虚となりし御墓の説明はできない。(二) 又此説にては安息日の變更せられし説明は不可能である。歴史の證明する所によれば、復活の結果安息日は一週の日より第一日に變更せられた。

(三) 此説にては弟子らの精神上の激變を證明することも不可能である——ゲッセマネの怯者が、イースターの勇者となれる説明はできない。之は消極的批評家たるカードナー教授(牛津)すら「復活の豫期」せられざりしことは、信ずべからざるほどの弟子らの卑怯より、確信ある信仰に一變する前に、或實際的の經驗の生ぜしことを證す」といへるほどである。

かくて舊來の論法は依然として力あるを覺ゆ。「復活は歴史的の事實なるか、然らずば聖徒パウロのいふが如く基督信仰は空し。」

(註) マルチノは感情的の幻影説——弟子らはキリストを墓ふ餘り、心中にキリストの幻影を見しなりとの説を唱へた。之は人好きのする説なれど、カイクムすら之を排した。

## 五、概 括

要するに復活の證據を否定せんとする竟極的の理由は、歴史的のものにあらずして、寧ろ哲學的のものである。即ち復活の事實は承認すべきものにあらずとの先天的見地の結果たるに過ぎない。ヘドラム監督はいふ「今日人々が、我らの主の復活と空墓に關する信仰に困難を覺ゆるは、實際其證據の性質に關するものにあらずして、或種の先天的見地による」(Bishop Headlam: Jesus Christ in History and Faith p. 167)。たとへば故ラシュダル博士の如きは其一例である。

「眞實に死せる體の生命の再現、若くは全然物質的にあらずして、而かも全然靈的に非ざる或物に急激に變形することは、最も確定せられたる物理学と化學と生理學の法則を破るものである。……されど今日我らの有する精神と精神、並に精神と身體との關係に見る因果律に關する智識によれば、弟子に對するキリストの顯現——<sup>スパー、ハイマ</sup>超正規的なれども、眞實の心理的事件としては、正當に自然法の停止といふが如きことを含ましらずて可能なりとのことに、何らの反對説もない。」

要するに此種の説はヘドラム監督の指摘せる如く、キリストの復活は科學的の法則に反す。此影——即ち心象的現象は、科學の法則に反するものにあらず、故に此種のことならんには、あり得べきこと

なりと謂はんとするものである。

此種の説には、根本的の誤謬がある。若し奇跡は不可能事なりとする宇宙に關する自然主義的の説を取るとせば、超正規的現象の生ずることは、他の奇跡の生ずると同様、不可能の事たるに相違ない。超正規的のことは承認し、超自然的のことは承認せざらんとす。されど果て此種の區別は爲され得べきことなりや。

元來、宇宙に關する見解は、結局、二の中、いづれか一に歸す。即ち(一)宇宙の法則は一定不動、何ら融通のきかざるものとするか。(二)或は自然的なるものは、世界に於ける神の行爲に關するわれらの智識を示すに過ぎずとするからである。若し前者をとらば、勿論、奇跡の可能性はない。又神が自身をインカーネートせしむることも不可能のこととなる。又死人のうちより甦りたまひしとの可見的證據を提供することも不可能となる。されど後者をとるとせば、自然法を破ることは有るべからざることの如く思はれ、又經驗に反するが如くに思はるるも、決して不可能のことにはあり得ない。事件は事件に關する證據によりて決定す。然るに此證據を正用せず、唯世界に關する或種の先入的の自然的見地を以て證據を承認し難しとす。之は公正なる學徒の態度なりといひ得ない。ヘドラム監督はいふ。

「若し靈的勢力によりて支配せられ、而てこれらの靈的勢力は、イエスキリストに於て、インカーネートせし

とせば、キリストの身體の正規的法則に超越し得ざる理由あるべきや。其復活の現實性を證明する或種の事件生じ、而てこれらは弟子らをして、福音を説き、教會を建設するに至らしめし證據の一群を造り得ざる理由あるべきや。予には復活に伴ふて續出せし種々の事件に關する善き、強き、證據を綜合するときは、我らの精神に合理的確信を齎らし得るに足ると思はる」(Bishop Headlam: Jesus Christ in History and Faith pp. 168-9)

(註) W. J. S. Simpson: The Resurrection and Modern Thought. Ch. VII.

F. J. Hall: The Passion and Exaltation of Christ, pp. 200-7.

W. J. S. Simpson: The Resurrection of Our Lord pp. 42-43, 53-57. 100-115.

": "Resurrection" in Hastings' Dict. Xt. Gospel pp. 510-512

W. Milligan the Resurrection of the Lord. pp. 86-114.

Ch. Harris: Pro Fide pp. 463-501

E. G. Selwyn: "The Resurrection" in Essays Catholic and Critical. pp. 279-319.

": "The Evidence of Resurrection in "New Commentary of the Holy Scripture,

N. P. Williams: The First Easter Morning. 卷三。

信仰再建文庫 第一輯

(残部あり)

# 救主は處女より産れたまひしや

(定價郵税共 金參拾錢)

——世 評——

「我が日本聖公會に一異彩を放てる稻垣博士の近業「信仰再建文庫」第一輯である。

量に於ては小冊子なれど、質に於てはまさに是れピュア・ゴールドである。

著者の學者たるが故に、議論は堂々たるもの、引用は豊富、文章は雄健、冗言冗句なく、一言一句、皆用をなすの活文字。……特に我らの主イエスの處女産の事實が不健全な神學者等の疑惑の濃霧に蔽はるゝことの屢なる時に、此の書は一種の救済である。

著者は今後引き續き此の種の著述に其の努力を傾注せられ、公會の基礎的信仰を確立固定せしめんものとして、同志を叫合せられてアタナシオ會を組織せらる。信念に又思想に大に動搖を來たせる現代に對して洵に適切なムーブメントとして大に賛意を表す。次第である」(あけほの)

昭和五年三月二十日印刷

昭和五年三月二十二日發行

(定價金四拾錢)

著者 東京市外池袋一六一二 稻垣陽一郎

發行所 アタナシオ會

右代表 東京市外池袋一六一二 稻垣陽一郎  
振替東京四六四三五

印刷者 東京市外西巢鴨町庚申塚一二六 澤田文雄

印刷所 東京市外西巢鴨町庚申塚一二六 學園印刷所

一手販賣所 東京市麻布區材木町二十四番地 聖公會出版社

振替東京四一七四〇

LIBRARY OF RECONSTRUCTION OF BELIEF.

No. 2. March, 1930.

---

“The Lord is Risen Indeed.”

A Vindication of the  
Fact of the Resurrection.

By

The Rev. Yoichiro Inagaki, S. T. M., D. D.

THE ATHANASIAN SOCIETY,

1612 Ikebukuro, Tokyo.

---

Sold at

The Church Publishing Society,

24 Zaimokucho, Azabu, Tokyo.

---

Price 40 Sen



終

